連載「大友時代を生きた人々」

国際文化学部長 鹿毛敏夫教授の「千利休～豊臣政権のフィクサー～」が掲載

●大分合同新聞朝刊　2026 年 10 月 28 日(水)

大友時代を生きた人々



鹿毛　敏夫

千利休

豊臣秀吉が打ち立てた全国政権は、秀吉―秀長の兄弟を頂点に、その脇を複数の重臣が固める政治体制でした。1586（天正14）年4月6日、大坂城を訪ねた57歳の大友義鎮（宗麟）は、大広間で秀吉らに面会し、その会談内容と城内の見聞を豊後の重臣たちに書き送りました。筆まめな義鎮が書き残したその古文書を読み解くことで、豊臣政権幹部の人間関係や、大坂城内の空間構造が詳細に解明できます。

謁見の場で義鎮を迎えたのは、50歳の秀吉、47歳の秀長の他に、15歳の宇喜多秀家、53歳の細川幽斎、48歳の前田利家、50歳の安国寺恵瓊、54歳の宇喜多忠家ら10人の面々で、その末席に最年長65歳の千利休がいました。

会談の後、秀吉は自ら案内役となって、大坂城内各所を見学させています。まず、義鎮がその「見事さ」に驚いた黄金の茶室では、「御茶宗易たてられ候」と、宗易＝千利休が黄金茶道具を使って茶を点てました。その後、秀吉自らも一服点てて、義鎮とその随行家臣に振る舞っています。

次に案内されたのは、名物のブランド茶壺五つを秘蔵する蔵。秀吉は、それぞれの壺を、茶頭と呼ぶ茶人に管理させていました。そのうち、かつての室町幕府の将軍足利義政旧蔵の「四十石」と、所有者がわが子のように撫でて愛蔵したことに由来する「撫子」の二つの茶壺は、「宗易袋ヲとり拝見させられ候」と、利休が金襴の袋からうやうやしく出してきて拝見したとあります。

そもそも、この大坂城での秀吉と義鎮の面会は、利休がその間を取り持ったようで、義鎮は「このたびは利休居士、心を添えられ馳走の様子、申し尽くしがたく候、永々忘却あるべからず候」と、その貢献を忘れてはならないと記しています。さらに、「宗易ならでは関白様へ一言も申し上ぐ人これ無しと見及び申し候」と、政権内部の人間で、利休以外で秀吉に意見具申できる人物がいない実態を、この日の会談で見抜いています。

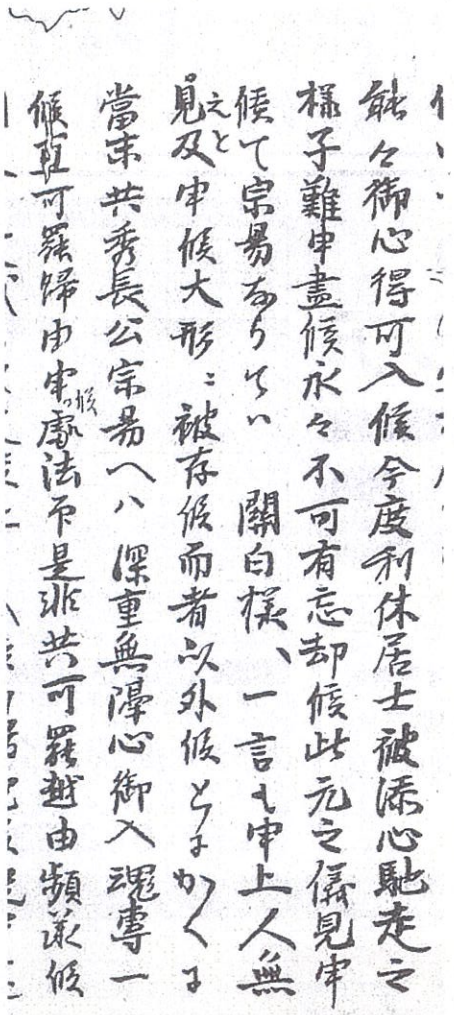
豊臣兄弟との別れ際、秀長は義鎮に、「内々の儀は宗易、公儀の事は宰相存じ候、御為に悪敷事は、これ有るべからず候、いよいよ申し談ずべし」と述べています。公のことは秀長が取り仕切り、内々のことは利休が差配するので心配ご無用。今後は相談しながら進めよう、との意味です。

茶人でありながら、豊臣政権のフィクサーとして水面下で交渉や根回しをし、時には独裁的な秀吉に意見を言える千利休の存在を、義鎮は記録としてはっきりと残しています。

（名古屋学院大学国際文化学部長・教授）

＝月1回掲載＝

豊臣政権のフィクサー



千利休について評した大友義鎮書状（部分、東京大史料編纂所影写本）